

本の数だけ、人生がある。——集英社の読書情報誌

# 青春と読書

'96 Nov. 11 集英社

鼎談  
川村二郎  
×  
菅野昭正  
×  
原 卓也

『集英社世界文学大事典』  
の編集にたずさわって

対談  
赤川次郎  
VS.  
井上 都  
芝居ばなし

《巻頭エッセイ》  
高橋 治  
私にとってのベストナム

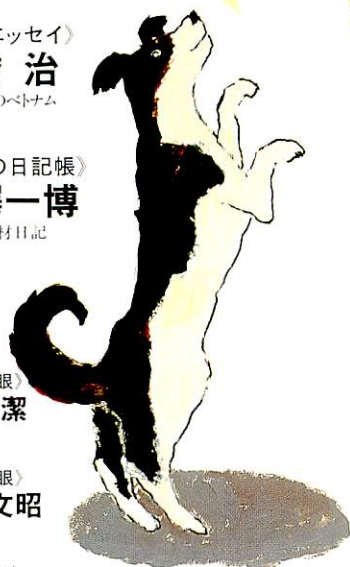
《作家の日記帳》  
柳澤一博  
ロンドン取材日記

《著者の眼》  
笠井 潔

《訳者の眼》  
野谷文昭

《本を読む》  
荒川洋治

定期購読者募集  
詳しくは本誌89頁をご覧ください。



《今月の読物》  
白石一郎  
海の彼方に  
佐々木涼子  
ブルーストとオペラ座  
木坂 涼  
恋愛小説を読みたのしみ

《掌篇小説》  
伊集院 静  
泥 絵

《読切り小説》  
伊達一行  
カムロ虚譚・マヨイカ

《今月のエッセイ》  
三田誠広  
坂東真砂子  
篠田節子  
山本昌代  
徳永 進

《連載読物》  
椎名 誠  
椎名 誠の  
忘れざれ旅日記

《連載小説》  
浅井慎平  
セントラル・アパート物語

# 青春と読書 NO.239

1996年11月号



巻頭エッセイ	私にとってのベトナム	高橋 治	2
今月の読物	海の彼方に	白石 一郎	8
	プールのオペラ座	佐々木涼子	40
	恋愛小説を読むたのしみ	木坂 涼	46
対 談	芝居ばなし	赤川 次郎 井上 都	12
今月のエッセイ	犬との対話	三田 誠広	24
	怖い話について	坂東眞砂子	26
	カラスが口を開ける夏	篠田 節子	28
	写 楽	山本 昌代	30
	土星が昇ると、木星は沈む	徳永 進	32
鼎 談	『集英社世界文学大事典』の 編纂にたずさわって	川村 二郎 菅野 昭正 原 卓也	49
掌篇小説	泥 絵	伊集院 静	20
読切り小説	カムロ虚譚・マヨイガ	伊達 一行	56
作家の日記帳	ロンドン取材日記	柳澤 一博	34
著者の眼	私立探偵飛鳥井の誕生	笠井 潔	66
訳者の眼	語りと再生	野谷 文昭	68
本を読む	クリストフ・バタイユ『アブサン』	荒川 洋治	38
連載小説	セントラル・アパート物語(11)	浅井 慎平	70
連載読物	椎名 誠のよれざれ旅日記(16)	椎名 誠	80

イミダス最前線 78 コラム・映像 渡辺祥子 45  
 レイモン・カノーが読む「すばる」11月号 19 新刊のお知らせ 89

表紙絵●長谷川和子 表紙デザイン●大西憲文  
 イラスト●沢野ひとし/矢吹申彦/長友啓典/根本 孝  
 安田みつえ/ツツミエミコ

本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

# プーレストとオペラ座

佐々木 涼子

ささき・りょうこ ● 仏文学者、舞踊評論家。石川県生まれ。東京大学卒。現在、東京女子大学教授。プーレスト研究の傍ら舞踊についてエッセイや批評を書く。著書に『ロマネスク誕生—プーレストの文学をめぐる七章—』これだけは見ておきたいバレエ』等。



『失われた時を求めて』という小説の舞台になっているのは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのパリである。通称ベール・エポック（美しい時代）と呼ばれているこの時代、パリは世界でも最も華やかな都市だった。石畳の通りを馬車が行き交い、貴婦人たちは長いドレスの裾を引いて、優雅に日傘を傾ける。そんな絵に見るような風景がじっさいに動き出したのが、いつてみればプーレストの世界なのである。しかも、登場するのは、ほとんどが上流社交界の人々。優雅とか華麗という点にかけては、ちよつとプーレストの小説の右にできるものは見当たらない。

この小説のなかに登場するのは超高級な場所ばかりで、その時代でも、ごくごく少数のエリートだけしか出入りできないものだった。当然、一般の庶民の見聞きできるものではない。そういう手の届かない世界を覗き見させてくれるのも、『失われた時を求めて』という小説の大きな魅力だったのではないだろうか。プーレスト文学という、人はとかく内省的で哲学的、難解なものだとばかり思い込んでしまうのだけ

れども、実際には、多分に週刊誌的な面をもっているのだ。と言ったからといって、プーレストの文学的な価値を貶めることにはならないだろう。小説というものは、どんな名作であっても、いや名作なればこそ、『クレイヴの奥方』にしても『ボヴァリー夫人』にしても、そしてまた『源氏物語』にしても、そういう野次馬根性なしには、書かれも読まれもしなかつたにちがいないのだから。

というわけでプーレストの小説世界は、同時代の人にとつてもなかなか眼にする折のない華やかさのなかに展開していく。まして二〇世紀末の、それも日本に住む私たちにとつては、大貴族の邸宅の奥まったサロンで催されるパーティーなど、ついぞ経験することのできそうにないものだが、そのなかで何か所だけ、私たちにもプーレストの小説さながらの気分を味わうことのできる場所がある。それがパリ・オペラ座だ。

パリの中心に位置するこの劇場が、そのシャンデリアの輝きを全開にして登場するのは、第三篇『ジェルマントの方』に入つてまもなく、主人公の「私」が、あこがれのジェルマント

アメリカ帰りの私立探偵・飛鳥井が  
現代社会の病巣を抱えた難事件に  
挑むミステリー4編。

笠井 潔



## 道

〈シエルソミナー〉私立探偵飛鳥井の事件簿

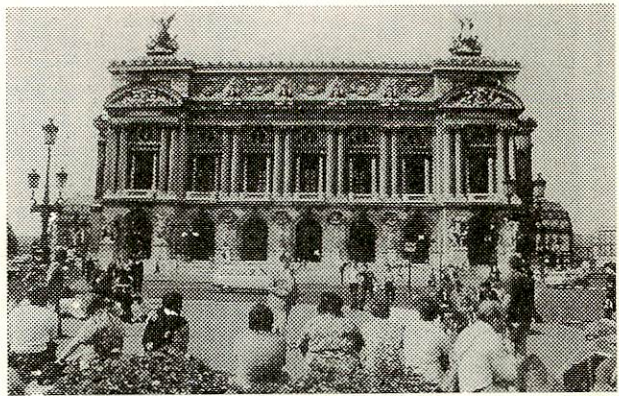
結婚相談所の経営者が飛鳥井を訪ねた。新婚でもない男性が不可解な自殺をしたのだ。同時に妻が失踪し、夫の金庫からは全財産が消えていた。結婚詐欺疑惑が浮上するが…表題作他。定価1,700円(税込)

公爵夫人が知人友人の招待でしばしば観劇に行く、と知るところからである。そうして、彼みずから足を運んでみたオペラ座では、

…パルム大公夫人は彼女自身、友人たちのあいだに階上のさじき席やバルコニー席、また一階の特等さじき席などと配ったものだから、会場はサロンのようであり、それぞれが席を変え、あちらこちら、あるいは女ともだちのそばへと、座りにいくのであった(『ゲルマントの方』)

ヨーロッパやアメリカでは、上流階級の人たちが劇場のチケットを定期購入する習慣がある。それも一枚や二枚ではない。公演毎にかならず大量に買うのである。現在でも、そういう定期購入の売り上げは、劇場によっては年間収入の三、四十パーセントにも上っていて、それがいわば劇場の運営の土台になっている。封建時代の昔から、王侯貴族が芸術を保護してきた伝統を、今に受け継ぐものだと考えたらいい。

そのような定期購入者であったパルム大公夫人の手元には、公演のチケットがドサツと届けられたのにちがいない。すると夫人はそれを親しい友人に配る。いつもは大公邸のサロンで顔を合わせる人たちだが、その日はオペラ座でお会いしましょうということになる。かくしてオペラ座は移動社交界に様変わりしてしまうのだ。



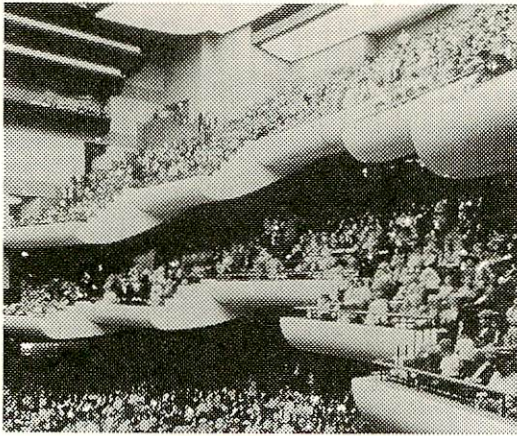
旧オペラ座

：社交界の人たちのほうは、それぞれのさじき席のなか（つまりテラスのように張り出しているバルコニーのうしろ）にいて、まるで一方の仕切りが取り外されてしまった宙ぶりの小さなサロンか、あるいは小さなカフェのなかで、これからバヴァロワーズでも食べようとしているかのよう…

そんな一階さじき席の薄闇に身をひそめている人影は、やがて舞台がすすむにつれて、一つずつ浮かび上がってきて、ふだんは人目にふれることのない生態をあらわにする。その彼らのしていることといえは：

オーマル公爵に向かって、姿の見えないある貴婦人が声を張り上げて「殿下、殿下のコートをお取りさせてくださいまし」と言えば、殿様は「あ、しかし、どうしてですか、アンブルサク夫人」と答えている。しかし、その漠然とした防御にもかわわらず、貴婦人はそれをやってのけ、そのような光榮に浴したことで、みんなから羨ましがられるのである。

他愛のない行為も、まるで人間のあいだにたまたま姿を現



新オペラ座

した神々さながらに、底しれず意味の深いものに感じられる。女神のような大公夫人が皮肉な調子で「ボンボンイかが？」と言えば、それを受けて半神さながらの侯爵は「そうですな、チェリーのを一ついただきたい」と、同じく神秘的なひねくれ気分で答えている。つまらないことが、独特の非日常的な照明を浴びて輝いて見えるのだ。ブルーストのオペラ

座では、舞台と同じように、あるいは舞台以上に、客席もまた「見られる」ものである。というのも、彼らを見るためにオペラ座に来て、いるといつてもいい人々が、ちゃんと周囲にいるのだから。

一定枚数の一階椅子席は窓口でも売られていて、スノップとか、好奇心の強い連中が買っていたが、彼らはそんなことでもなければ近くで見られる機会がない人々たちを眺めたいと思っているのであった。

私の脇にいた一般の大衆は、定期予約席の人たちを知らないのだが、彼らを見分けることができる場所を見

せようととして、その名を声高に言っていた。

ふだん近寄ることのできない人々を垣間見ることのできる場所。つまりオペラ座は、現代のテレビや雑誌のグラビアのようなものでもあった。私たちがテレビのワイドショーや週刊誌で、タレントの私生活とか皇室の妃殿下の写真などを見て、へえと思う。それと同じような面を、ブルーストのオペラ座はもっているのである。

ただ眺めるだけではない。そこから学ぶものもある。たとえば本物のエレガンスとは何かということ。見られることを十分意識している人々だから、誰もが工夫の限りを凝らした服装をしている。その上でなお：

「あれがゲルマント大公夫人」と私の隣の女性が連れの男性に言った(;)。「真珠をケチらなかつたのねえ。わたしがあれば同じだけ持ってたとしても、それをあんなふうに見せびらかしたりはしらないと思うわ。あれじゃま

ともに見えないと、わたし思うけど」  
けれども、それが大公夫人だとわかると、誰が会場にいるのか知りたいと思っていた人々はみな、自分の心のなかに、由緒正しい美の王座がすつくと立ったように感じるのであった。

が、そこへゲルマント公爵夫人が現れると、そのシックな装いはまた別格の迫力である。

大公夫人の頭から首筋まで下がっている見事な柔らかい羽根や、貝殻と真珠のヘヤネットの代わりに、公爵夫人は髪にたった一本の羽飾りをつけているだけ(;)、首と肩は雪のようなモスリンの波につつまれ、ついでドレスは、コルサージュの部分の細い棒や粒々の金属があるいはダイヤモンドの無数の光り物を唯一の飾りとして、彼女の体型をまったくイギリス風の正確さで型どつていた。

## 女性に天国はあるのか

サーダウィ/鳥居千代香訳 エジプトのフェミニスト作家による短編小説集18篇。 1854円

## あるフェミニストの告白

サーダウィ/1236円

## 最後まで人間らしく

患者の自己決定権について  
ハッケタール 安楽死援助=慈悲殺は犯罪か。合法的安楽死実現への具体案を提起。 2884円

## 民俗学の政治性

アメリカ民俗学100年目の省察から  
岩竹美加子編訳 民俗学の成立と近代国家の形成、ナショナリズム、ロマン主義。 2987円

## 海の文化史

ソロモン諸島のラグーン世界  
後藤明 貝殻作りの民をはじめ環太平洋の海人を訪ね歩き、海と人間との関わりを描く 2884円

《増刷出来!!》

## 母と私の老い支度

森南海子 高齢の母との日常を語り、服づくりを通して老いの問題を考える(作り方イラスト入)  
8/14朝日新聞家庭欄で紹介 1648円

《埴谷雄高対話集》

超時と没我 2575円

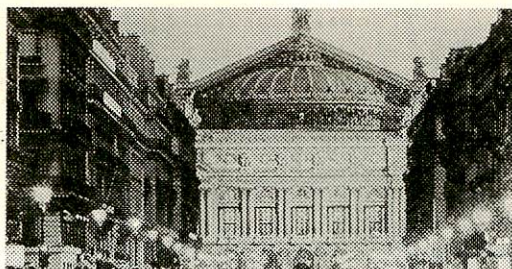
跳躍と浸潤 2575円

瞬発と残響 2266円

■1996年版図書総目録進呈

## 未来社

東京都文京区小石川3-7-2  
電話03(3814)5521 (定価は税込)



オペラ座とオペラ通り

言うなればオペラ座の客席はファッション・ショーか、オートクチュールのコレクションのようなものだ。ベストドレッサーの貴婦人の服装は、すぐにサロンの話題になる。そしてモードをリードしていくのである。

エレガンスのお手本が見られるのは、服装ばかりではない。たとえば、人にものをたずねる物腰一つにも、エレガンスの優劣がある。「父から受けとった切符で、私がオペラ座の大階段を昇って行ったとき」、前を歩いている男の人の後ろ姿だけで、それが最高級の貴族社会に属する人間だとすぐに見抜いたのは、「その人の服の着方のせいだけでなく、チケット係とか、彼を待たせている従業員たちに話すときの態度によってでもあった。」

というのも、個人差にもかかわらず、まだこの時代には、そういう部類の貴族のすべての洒落者で金持の男と、経済界や大企業のすべての洒落者で金持の男とのあいだに

は、とても際立った違いがあったからである。後者の一人が目下に対して偉そうに切り口上でものを言うことで自分をかっこよく見せていると思うような場で、大貴族のほうは、穏やかでにこやかに、謙虚でがまん強いふりをしたり、なんでもない観客の一人を装ったりして、それを自分が受けた良い教育の特権だと見なし、また実践しているように見えたものだった。

ちなみに、パリ・オペラ座は一九九一年、バステイユ広場に超近代的なホールがオープンし、現在は、古くからあるガルニエ宮と二つの大劇場を持っている。ブルーストの小説に登場するのはもちろんガルニエ宮のほうで、これはあのヒトラーも欲しいと言ったとかいう豪華絢爛な建物である。なかでも入口につづく大階段はすばらしく、オペラ座の顔といってもいい。一段一段昇っているうちに、夢の国に足を踏み入れるような気分になってしまう場所だ。

その大階段を、私たちも昇っていくことができるのだ。ブルーストのように。なんとという贅沢な楽しみだろうか。さもなければ『失われた時を求めて』を読むことができる。これもまた、負けず劣らず贅沢な知的快樂であることは、まちがいない。

※文中の引用はすべて第三篇『ゲルマントの方』より。訳者筆。

(写真提供：フランス政府観光局)

※『失われた時を求めて』についての詳しい内容は、本誌センターの口絵広告をご覧ください。